【原著】 大学入試研究ジャーナル第 33 号，94-99，2023

東北大学保健学科における総合型選抜の評価

――看護学専攻の「ＡＯ入試Ⅱ期」について――

宮本 友弘，久保 沙織，尾﨑 章子，宮下 光令，倉元 直樹，長濱 裕幸（東北大学）

東北大学保健学科看護学専攻において 2018 年度入試より導入されたＡＯ入試Ⅱ期（ＡＯⅡ）の検証を 3 つの観点から行った。志願者動向の分析からは，ＡＯⅡは東北地方を中心に安定した高い人気があることがうかがえた。また，ＡＯⅡ受験者・入学者の特徴分析からは，彼らが早期に志望を決定し，一般選抜も視野に入れて受験に臨み，入学後の学修成果が良好であることが示唆された。さらに，高校調査からは現状のＡＯⅡが肯定的に受け止められていることがわかった。以上から，看護学専攻のＡＯⅡの設計コンセプトは十分に理解され，うまく機能していることが明らかになった。これらをエビデンスにしながら，ＡＯⅡのさらなる改善が図られた。

キーワード：総合型選抜，看護系大学，エビデンスに裏付けられたアドミッション

1 問題

東北大学では，ＡＯ入試（総合型選抜）の募集人員拡大（全募集人員の 30%を目標）を柱にして，入試改革が進められてきた。その一環として，東北大学医学部保健学科の看護学専攻（以下，看護学専攻）では，2018 年度入試より，11 月実施のＡＯ入試Ⅱ期（以下，ＡＯⅡ）[1]が導入された。2021 年度入試において 4 学年がそろったことを契機として，ＡＯⅡの検証とそれに基づく改善に着手することになった。

東北大学入試センター[2]は，各学部・学科の要請に応じて入試に関する助言やコンサルテーションを実施している。保健学科内の入試関連委員会にもオブザーバー参加を続けており，看護学専攻のＡＯⅡについては，制度設計の段階から継続的に関わってきた。そうした立場から，ＡＯⅡの検証に際しても，積極的に関与している。本稿では，保健学科の教員と共同で進めているＡＯⅡの検証結果とそれに基づく改善について報告する。

1.1 看護学専攻のＡＯⅡの概要

看護学専攻の選抜は，2018 年度にＡＯⅡを導入する以前は，2 月実施のＡＯ入試Ⅲ期（以下，ＡＯⅢ）と一般入試前期日程（当時の名称，以下，一般選抜）の 2 種類であった。ＡＯⅡの募集人員は，ＡＯⅢの募集人員を 16 名から 10 名に，また，一般選抜の募集人員 54 名から 50 名にすることで 10 名とした。

ＡＯⅡとＡＯⅢでは，「（看護学専攻を）第 1 志望」及び「学力重視」という基本コンセプトに変わりはない。アドミッション・ポリシーにおいても重なる部分はあるが，ＡＯⅡでは，「保健医療の関連分野で指導者，大学や研究所で教育者，研究者として活躍をめざす人を歓迎します」とあり，この点において，「保健・医療，さらに福祉の分野で指導者として活躍をめざす人を求めています」とするＡＯⅢとの異同がある。

ＡＯⅡの選抜方法としては，第 1 次選考は出願書類（配点 150），筆記試験（配点 400）で行われ，第 2 次選考は，筆記試験（配点 200，第 1 次選考での成績を利用），面接試験（配点 200）で行われる。また，出願要件として「数学」と「理科」の履修科目が設けられた。「数学」は，「数学Ⅰ」，「数学Ⅱ」，「数学Ａ」，「数学Ｂ」（理数科にあっては，「理数数学Ⅰ」，「理数数学Ⅱ」，「理数数学特論」）とした。一方，「理科」は，「物理基礎」，「化学基礎」，「生物基礎」としたが，これは，文系からの志願の可能性も考慮したためであった。しかし，高校との意見交換を通して，志願者の実態とそぐわないことが示唆されたため，「理科」の履修科目は 2019 年度入試からは除外されることとなった。その他，2021 年度入試から面接試験の評価内容として「英語で話すための基礎的な能力」が追加された以外は，直近の 2022 年度入試までは変更はなされていない。

1.2 目的

先述の通り，本稿では，看護学専攻のＡＯⅡの検証結果とそれに基づく改善を報告することを目的とする。その際，できるだけ多角的な観点からの検証を試みた。具体的には，次の 3 つの作業を行った。第 1 は，導入初年度から直近までの志願者動向の分析である。第 2 は，ＡＯⅡ受験者・入学者を対象にした複数の調査

からＡＯⅡ志願者の特徴を探索した。第 3 は，宮本（2021）に基づき，これまでＡＯⅡへの志願者があった全高等学校を対象にした調査からステークホルダーのニーズを分析した。これらを総合して，看護学専攻のＡＯⅡの評価と今後の改善点について検討する。

なお，ＡＯⅡの出願書類，筆記試験，面接試験の信頼性・妥当性については，保健学科からの要請に応じて継続的に検証し，改善が図られている。

2 志願者動向

まず，志願者動向について検討する。図 1 は，ＡＯⅡが導入された 2018 年度入試から直近の 2022 年度入試までの看護学専攻における各選抜の志願者数の推移を示したものである。ＡＯⅡをみると 2021 年度を除き，全体的な傾向としてはおおむね安定していた。また，図 2 は，同期間における各選抜の志願者倍率を示したものである。図 1 の推移と同期した変化となるが，ＡＯⅡの倍率が一貫して他の選抜よりも高かった。

なお，2021 年度は，ＡＯⅡ，さらにはＡＯⅢの志願者が大きく増加し，それとは対照的に一般選抜の志願者が減少した。おそらくは，大学入学共通テストといった新制度の開始年度であることと，新型コロナウイルス感染症に対する不安も重なり，受験生の「早めに決めたい」という志向が強まったためと考えられる。

表 1 は，過去 5 年間の各選抜における志願者の出身地域の割合を示したものである。2020 年度ＡＯⅢを除き [3]，年度にかかわらずすべての選抜で東北地方出身者の割合がもっとも高かった。とくにＡＯⅡではその傾向が強く，すべての年度で 8 割以上を占めた。

以上，看護学専攻のＡＯⅡの志願者は，東北地方を中心に導入当初から一定数みられ，3 倍以上の志願倍率が維持されてきた。西郡（2015）によれば，看護系大学志望者は地元の大学を志向する傾向があることが示唆されている。今回の結果からは，東北地方のそうした志望者において，看護学専攻のＡＯⅡが選択肢の１つとして定着していることが明らかになった。

3 ＡＯⅡ受験者・入学者の特徴

次に，ＡＯⅡ受験者・入学者を対象にした３つの調査結果から，その特徴について検討してみたい。

3.1 新入学者アンケートの結果

東北大学では毎年 4 月に全新入学者を対象にした質問紙調査（「新入学者アンケート」といい，回収率はほぼ 100%）を実施している（詳しくは，宮本ほか，2022）。そこでは，2019 年度より，ＡＯⅡ，ＡＯⅢの受験経験を詳細に尋ねている。

表 2 は，看護学専攻の入学者のうちＡＯⅡを受験しながらも不合格になった者が，その後，合格に至る

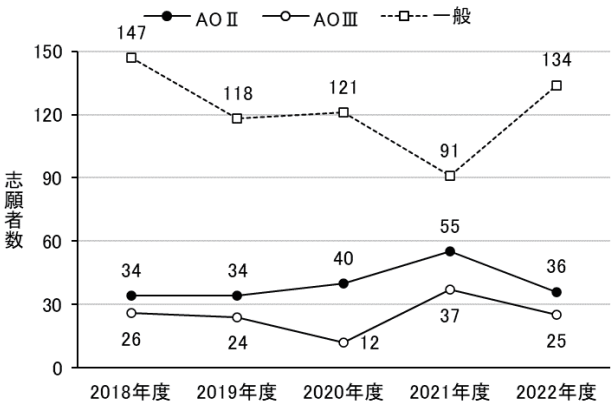

図 1 各選抜の志願者数

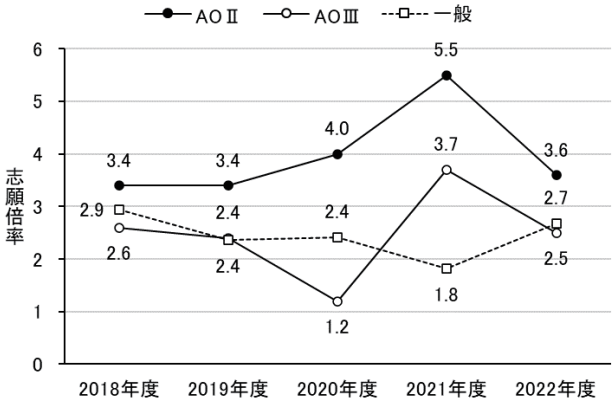

図 2 各選抜の志願者倍率

表 1 各選抜における志願者の出身地域の割合（%）

選抜	年度	北海道	東北	関東	中部	近畿以西
ＡＯⅡ	2018 (*N*=34)	2.9	88.2	0.0	8.8	0.0
	2019 (*N*=34)	2.9	82.4	5.9	5.9	2.9
	2020 (*N*=40)	0.0	85.0	5.0	5.0	5.0
	2021 (*N*=55)	1.8	80.0	9.1	5.5	3.6
	2022 (*N*=36)	0.0	83.3	2.8	5.6	8.3
ＡＯⅢ	2018 (*N*=26)	3.8	61.5	11.5	19.2	3.8
	2019 (*N*=24)	0.0	66.7	20.8	12.5	0.0
	2020 (*N*=12)	0.0	16.7	50.0	25.0	8.3
	2021 (*N*=37)	2.7	81.1	8.1	8.1	0.0
	2022 (*N*=25)	0.0	76.0	16.0	4.0	4.0
一　般	2018 (*N*=147)	2.0	64.6	14.3	13.6	5.4
	2019 (*N*=118)	1.7	75.4	10.2	10.2	2.5
	2020 (*N*=121)	1.7	66.1	18.2	11.6	2.5
	2021 (*N*=91)	5.5	73.6	11.0	8.8	1.1
	2022 (*N*=134)	2.2	67.9	13.4	11.9	4.5

までにどのような受験行動をとったかを示したものである。ＡＯⅡに不合格後も一般選抜まで受験する者が毎年一定数おり，ＡＯⅡの志願者数（図 1）からみれば，決して少なくない人数である。看護学専攻のＡＯⅡ受験者は，看護学専攻への入学を強く志望していることがうかがえる。また，東北大学のＡＯ入試は「学力重視」であるため，ＡＯ入試受験者も一般選抜に対する準備を整えている（倉元, 2020）が，それと符合する結果でもある。

以上から，看護学専攻のＡＯⅡでは，「第 1 志望」と「学力重視」をベースにした設計コンセプトが良好に機能していることが示唆される。

3.2 看護学専攻 2 年生対象アンケートの結果

高校時代の履修状況等を探るために，2021 年 1 月に看護学専攻 2 年生 64 名を対象に質問紙法による調査（Google フォーム利用）を実施した [4]。その結果，58 名から回答が得られた（回収率 90.6%）。入学した選抜の種類は，ＡＯⅡ入学者が 10 名，ＡＯⅢ入学者が 6 名，一般選抜入学者が 42 名であった。また，高校時代の文系・理系については，一般選抜入学者のうち 1 名のみが文系コースで，それ以外は全員理系コースであった。

数学Ⅲの履修状況をみると，表 3 の通り，「履修した」はＡＯⅡ入学者及びＡＯⅢ入学者で 7 割程度あるのに対し，一般選抜入学者では 9 割以上であった。また，ＡＯⅡ入学者では「履修した」と「履修しなかった」に分かれ，他の選抜による入学者よりも「履修しなかった」が多かった。一方，ＡＯⅢ入学者，一般選抜入学者では「途中まで履修した」[5]という回答もみられた。

理科選択科目の履修状況（物理基礎のみ，化学基礎のみ，生物基礎のみの履修は除く）については，表 4 の通り，入学した選抜にかかわらず，全員が化学を履修した。ＡＯⅡ入学者，ＡＯⅢ入学者では約 8 割が生物，約 2 割が物理であるのに対し，一般選抜入学者では両科目の履修はほぼ同じ割合であった。

履修状況に加えて，看護系大学と，東北大学の看護学専攻それぞれの受験決定時期についても尋ねた。表 5 の通り，看護系大学の受験は，ＡＯⅡ入学者，ＡＯⅢ入学者では 8 割以上が高校 2 年生の終わりまでに決定したのに対し，一般選抜入学者では 4 割程度であった。また，東北大学の看護学専攻の受験は，ＡＯⅡ入学者では 6 割が高校 2 年生の終わりまでに決定したのに対し，ＡＯⅢ入学者，一般選抜入学者では 3 割程度あった。

表 2 ＡＯⅡ不合格者の受験行動（人）

年度	ＡＯⅡ不合格→ＡＯⅢ合格	ＡＯⅡ不合格→ＡＯⅢ不合格→一般選抜合格	ＡＯⅡ不合格→一般選抜合格
2019	0	2	2
2020	1	1	5
2021	0	8	6
2022	0	3	6

表 3 各選抜入学者の数学Ⅲの履修状況（%）

選抜	履修した	途中まで履修した	履修しなかった
ＡＯⅡ（N=10）	70.0	0.0	30.0
ＡＯⅢ（N= 6）	66.7	16.7	16.7
一　般（N=42）	90.5	7.1	2.4

表 4 各選抜入学者の理科選択科目の履修状況（%）

選抜	物理	化学	生物
ＡＯⅡ（N=10）	20.0	100.0	80.0
ＡＯⅢ（N= 6）	16.7	100.0	83.3
一　般（N=42）	54.8	100.0	50.0

注）一般選抜入学者のうち 2 名が 3 科目を履修

表 5 各選抜入学者の看護系大学及び東北大学看護学専攻の受験決定時期（%）

選抜	看護系大学受験決定		東北大学看護学専攻受験決定	
	高 2 終りまで	高 3 以降	高 2 終りまで	高 3 以降
ＡＯⅡ（N=10）	90.0	10.0	60.0	40.0
ＡＯⅢ（N= 6）	83.3	16.7	33.3	66.7
一　般（N=40）	37.5	62.5	27.5	72.5

注）一般選抜入学者のうち 2 名が無回答

以上から，看護学専攻においてＡＯⅡ入学者は，高校時代は理系コースであると考えられる。ただし，理科選択科目の履修は一般的な理系と同様であるが，数学Ⅲの履修は必ずしもなされていない。これは，高校 2 年生の終わりまでには看護系大学，さらには東北大学の看護学専攻への受験を決定しており，数学Ⅲを入試で使わないとする見通しによるものと推察される。こうした早期の意志決定は，3.1 で示唆された看護学専攻への強い志望とも整合すると考えられる。

3.3 追跡調査の結果

追跡調査として，入学年度（2018 年度～2021 年度）ごとに 2021 年度までに履修した全科目の累積ＧＰＡを，入学した選抜の種類別に算出した。算出にあたっては休学者，退学者は除外した。選抜の種類を累

積ＧＰＡの平均値[6]の高い順に並べると，2018 年度入学者ではＡＯⅢ，ＡＯⅡ，一般選抜，2019 年度入学者ではＡＯⅡ，ＡＯⅢ，一般選抜，2020 年度入学者ではＡＯⅢ，ＡＯⅡ，一般選抜，2021 年度入学者ではＡＯⅡ，ＡＯⅢ，一般選抜，の順であった。いずれの年度であっても，ＡＯⅡ入学者の成績は，一般選抜入学者よりは高かった。

ＡＯ入試入学者は入学時の学力水準が一般選抜入学者と同等以上で，かつ意欲が高いことから入学後も活躍が期待できる（倉元，2020）。実際，宮本（2019）において，ＡＯ入試入学者の卒業までの累積ＧＰＡが，一般選抜入学者よりも高いことが示されてきた。今回の結果も，そうした傾向と一致するものであった。

4 高校の評価

最後に，ステークホルダーである高校側の評価を把握するために実施した調査結果について検討する。

4.1 調査の概要

2021 年 9 月～12 月にかけ，過去 4 年間（2018 年度～2021 年度）の入試でＡＯⅡへの志願者がみられた全高等学校 89 校を対象に質問紙法による調査（Google フォーム利用）を実施した。調査内容は，次の 3 項目であった。①ＡＯⅡ導入に対する評価（「大いに評価する」，「ある程度評価する」，「あまり評価しない」，「評価しない」の 4 件法），②募集人員（10 名）に対する評価（「多すぎる」，「適切だ」，「少なすぎる」の 3 件法），③生徒へのＡＯⅡの受験の勧め（「強く勧める」，「勧める」，「あまり勧めない」，「勧めない」の 4 件法）。いずれの項目も，評定とともにその理由（自由記述）を尋ねた。

4.2 調査結果

60 校（回収率 67.4%）からの回答が得られた。まず，ＡＯⅡ導入に対する評価については，「あまり評価しない」，「評価しない」といった否定的な回答は無かった。「大いに評価する」が 75.0%，「ある程度評価する」が 25.0%であった。「大いに評価する」と回答した者の理由をみると，多くが「受験機会が増えた」と，「学力とともに，看護師としての意欲や適性も評価してもらえる」をあげていた。

募集人員に対する評価については，「適切だ」が 86.7%であった。その理由の多くは，「ＡＯⅢ，一般選抜とのバランスが良い」であった。一方，「多すぎる」は 1.7%と僅かではあったが，「少なすぎる」は 11.7%ほどであった。その主な理由としては，「第 1 志望とする生徒のチャンスをもっと広げてほしい」であった。

生徒へのＡＯⅡ受験の勧めについては，「強く勧める」が 36.7%，「勧める」が 56.7%であった。理由をみると，ＡＯⅡ導入を評価する理由と重なるものが多かったが，勧める際の生徒の条件として，「第 1 志望であり，学力が一定水準以上であること」が付記されてもいた。一方，「あまり勧めない」は 5.0%，「勧めない」は 1.7%であり，主な理由としては，「準備が大変である」であった。

以上から，看護学専攻のＡＯⅡに志願者を輩出している高等学校においては，ＡＯⅡはおおむね肯定的に評価されており，重大な問題は見いだせなかった。多くの高等学校において，看護学専攻のＡＯⅡの設計コンセプトは十分に理解されており，それにそった進路指導がなされていることがうかがえた。

5 結果の総括とＡＯⅡの改善

5.1 結果の総括

本稿では，3 つの観点から，看護学専攻のＡＯⅡの検証を試みた。まず，志願者動向の分析からは，ＡＯⅡは，東北地方を中心に安定した高い人気があることが明らかになった。看護系大学志望者は地元志向が強いことから，東北地方のそうした志望者層のニーズとうまく適合していると考えられる。

また，ＡＯⅡでの受験を目指す者の特徴としては，①理系であること，②看護学専攻への志望決定が比較的早期になされること，③ＡＯⅢ，一般選抜での受験も視野も入れていること，④入学後の学修において高いパフォーマンスが期待できること，が示唆された。

さらに，高校においては，現状のＡＯⅡが肯定的に受け止められていることがわかった。生徒には，「学力については，一般選抜と同等以上の水準を求める」という本学のアドミッション・ポリシーを念頭において，推奨してもいる。東北地方においては，学力重視という「東北大学型ＡＯ入試」の特徴が浸透していることの証左でもあろう。

以上から，高校生にも，高校教員にも，看護学専攻のＡＯⅡの設計コンセプトは十分に伝わっており，それに応じた計画的な受験勉強や，進路指導がなされていると考えられる。看護学専攻においてＡＯⅡを導入したことは，現時点においては成功だったといえよう。

ただし，募集人員に関しては，大半の高校からは「適切」という評価を得たが，一部の高校からではあ

るが，「少ない」という声もあった。ＡＯⅡの志願者倍率と，ＡＯⅡ入学者の学修成果の良好さに鑑みると，検討の余地はあると考えられる。その際，ＡＯⅢ，一般選抜の志願者数の変動（図 1）とともに，ＡＯⅡの志願者層の基盤となっている東北地方においての，高校生の看護系大学に対するニーズの動向や，少子化の状況についても十分考慮する必要がある。

追跡調査についての課題もあげておきたい。本研究では，入学後の学修成果の指標として，ＧＰＡを取り上げた。当然ながら，ＧＰＡ以外の指標を用いて検討する必要がある。例えば，看護学専攻の教員からは，ＡＯⅡ入学者は実習態度が極めて良好な学生が多いといった声が寄せられている。このように，ＡＯⅡ入学者特有のパフォーマンスといった視点から，新たな指標を開発することが課題である。

また，先述した通り，ＡＯⅡのアドミッション・ポリシーでは，「大学や研究所で教育者，研究者として活躍をめざす人」を求めている。したがって，大学院とくに博士後期課程への進学などもみていく必要があろう。しかしながら，看護学分野では，大学卒業後すぐに大学院へと進学はせず，看護師として何年間か実践経験を積んだ後，進学するケースがよくあるという。看護学研究者のキャリアパスに沿って，長期的な視野に立った追跡調査が望まれる。

5.2 ＡＯⅡの改善

以上の結果については，保健学科内の入試関連委員会においても報告され，エビデンスの 1 つとして参照されながら，ＡＯⅡの改善についての検討がなされた。その結果，次の 2 点について変更が図られることとなった。

1 つは，ＡＯⅡの定員の拡充である。2023 年度入試より，一般選抜の募集人員を 50 名から 48 名に減らし，ＡＯⅡの募集人員を 10 名から 12 名に増やすこととなった。

もう 1 つは，一般選抜との整合性の向上である。具体的には，2024 年度入試からＡＯⅡの出願要件として「理科」についての履修科目が設けられることとなった。1.1 で述べた通り，これまで，ＡＯⅡの出願要件には，「数学」のみの履修科目が設けられてきており，一般選抜個別学力試験の出題科目と同様に「数学Ⅲ」は除かれていた。しかし，「理科」については，2019 年度以降からは履修科目の指定は除外された。そこで，一般選抜個別学力試験の「理科」の出題科目にあわせて，「物理」，「化学」，「生物」のうち 2 科目以上（理数科にあっては，「理数物理」，「理数化学」，「理数生物」から 2 科目以上）の履修を要件とした。なお，これら 2 点の変更については，2022 年 4 月 15 日に「予告」として公表されている。

このように，東北大学入試センターと保健学科の教員との共同で進めてきた看護学専攻のＡＯⅡの検証結果は，エビデンスとしてＡＯⅡの改善に寄与することができた。本学では，第 4 期中期目標・中期計画において「エビデンスに裏付けられた新たなアドミッションの展開」を掲げているが，本稿で報告した取り組みは，その一環でもある。今後も，さまざまな学部・学科と連携しながら，推進していく予定である。

注

1）東北大学のＡＯ入試には，ＡＯ入試Ⅱ期（11 月実施，現役生のみ），ＡＯ入試Ⅲ期（2 月実施，過年度生も可）の 2 種類がある。「本学第 1 志望」と「学力重視」という基本コンセプトは同じであるが，学力水準を把握するために，ＡＯ入試Ⅱ期では独自の筆記試験を，ＡＯ入試Ⅲ期では大学入学共通テストを課している。

2）著者のうち，宮本友弘，久保沙織，倉元直樹，長濱裕幸の所属は入試センター，尾﨑章子，宮下光令の所属は医学部保健学科である。

3）2020 年度ＡＯⅢについては，東北地方からの志願者の割合が前年度に比べて大幅に減少したが，翌年度以降は回復した。このことから，2020 年度ＡＯⅢでは特殊な事情があったと推察される。この点についての追求は，本研究の目的に照らし，別稿に譲りたい。

4）調査は宮下光令が，担当する授業での事後課題の一部として実施した。その際，教示文として，回答は任意であり，回答しなくても成績評価に関係ない旨を明記した。

5）高校によっては，数学Ⅲの授業が前倒しで実施され，2 年生の後半で学ぶことがある。その上で，入試で使わないこと等から 3 年生では数学Ⅲを選択しないという者もいる。そうしたケースが「途中まで履修した」に該当する。

6）倫理的な配慮から具体的な数値についての公表は差し控えたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409 の助成を受けたものである。

参考文献

倉元直樹 (2020). 「受験生保護の大原則に従った入試制度改革を――英語民間試験利用を見送った東北大学の入試設計思想――」『中央公論』134(2)，80－87.

宮本友弘 (2019). 「『主体性』評価の課題と展望――心理学と

東北大学ＡＯ入試からの示唆――」東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学入試における「主体性」の評価――その理念と現実――』東北大学出版会，7－29.

宮本友弘 (2021). 「エビデンスからみた大学入試学の意義と実際」倉元直樹監修，宮本友弘・久保沙織編『大学入試を設計する』金子書房，2－25.

宮本友弘・久保沙織・倉元直樹・長濱裕幸 (2022). 「東北大学志望を促進する要因の検討――新入学者アンケートから――」『大学入試研究ジャーナル』**32**, 69－76.

西郡大 (2015). 「高校教員からみた看護系進学希望者の特徴」『平成22～26年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号22390405) 研究成果報告書　医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題――看護職志望者の適性と大学入試――』, 151－164.